

岩波ジュニア新書 6

1945年8月6日

ヒロシマは語りつづける

伊東 壮著



1945年8月6日

— ヒロシマは語りつづける —

伊東 壮 著



岩波ジュニア新書 6

1945年8月6日

岩波ジュニア新書 6

1979年7月20日 第1刷発行 ©

1980年3月10日 第4刷発行

¥ 480

著 者 ^い伊 ^{とう}東 ^{たけし}壯

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 巖 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目

次



1 ある日突然——天をさく閃光——……………一

海の底で(三) 倒れた校舎からはい出て(七) 生き残った三人姉弟

(二二) 日本人も朝鮮人もなく(三〇)

2 戦争のなかの暮らし……………元

広島(三〇) 長崎(三三) 満州事変とともに(三四) 日中戦争始

まる(三五) 太平洋戦争に突入(四三) 負けはじめる戦争のもとで(四六)

勉強をやめて工場動員へ(五三) 朝鮮人・台湾人も動員(五五) ひもじ

さにたえる「学童疎開」(五六) むごたらしさの果てに(六四)

3 戦争は終わったが……………七

原子爆弾の破壊力(六〇) 広島・長崎の被害(七一) 傷ついたからだ

(七五) 心のケロイド(七八) 消えぬ十字架(八三) 焼け跡のパラックで

(八四) 襲いかかる原爆病(八七) 貧しさのどん底で(八八) 閃光はおな

かの赤ちゃんにまで(九〇)

4 原爆はなぜ広島・長崎へ……………壺

アインシュタインの手紙(九六) 原子の構造(九九) 質量はエネルギー

に変わる(一〇〇) ナチスとユダヤ人科学者(一〇四) 原爆の研究スター

ト(二〇六) 秘密裏にすすむマンハッタン計画(二一〇) 情報のひとりじめ(二二四) 原爆をどの国に落とすか(二二六) 日本に落とそう(二三〇) ソ連を牽制するために(二三四) 戦争のモラルは変わった(二三六) どの都市に落とすか(二三〇) 原爆をいかにうまく使うか(二三四) 科学者たちの良心の叫び(二三六) 「赤ん坊は申し分なく生まれた」(二四三) 投下命令が出される(二四四) 「ちび」と「ふとっちょ」(二四五)

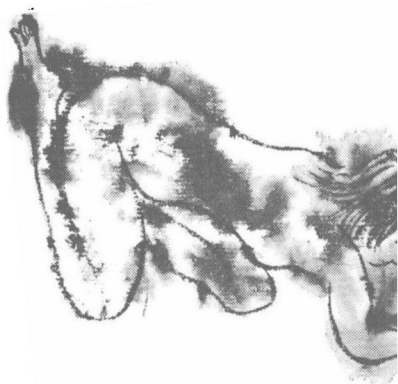
5 あなた自身が生き残るために……………一五七

戦争は突然終わった(二五五) 暗幕のかげで(二六〇) 東条内閣倒れる(二六三) すすむ和平工作(二六六) だまされつづけた国民(二七〇) 世界への第一報(二七四) プレスコードのもとに(二七五) 「おれたちは原爆のモルモットか」(二七九) 人類の危機(二八三) 第三次大戦がおこれば(二八七) 知らぬ間に核兵器にかこまれて(二九〇) スリーマイル島の教訓(二九三) 亡き学友の名をなでながら(二九七)

あとがき……………二〇三

〈年表〉原爆が投下されるまで……………二〇七

Ⅰ ある日突然
—天をさく閃光—



海の底で
その時……

喜久子は、列のはじめにいました。だって、クラスでいちばん背が低かったんですもの。

先生は、いつものようにきりっとした口調で

「けがをしないように、注意して、作業するように」と話されていました。

頭の上にひろがった空はまっ青でした。雲一つありません。八月六日の一日が始まろうとしていました。

今日も一日暑いだろうナ。空襲のとき逃げられるように、家をこわすなんて大変。今日一日で、ここからあそこのかどまでみんなこわすのね。そう、先生のおっしゃるようによくぎをふみ抜かないように注意しなけりゃ。だけど、この二階家、どんな人が住んでたのかしら。私のうちみたいにお父さんは戦争へいっちゃって、おばあさんとお母さんと私や弟たちのような子どもが住んでいたのかナ。どこへ引っこしたのかナ。命令がでると二三日のうちに引越さなくちゃいけないってきいたけど、私のうちみたいに田舎がないと困

るナ。

そんなことがふっと頭にうかんだ時、空のどこかで爆音をきいたような気がしました。気のせいかな。じっと耳をすますと、たしかに爆音です。変だな。敵の飛行機？ そんなはずないわ。それなら、警戒警報や空襲警報のサイレンがとつくに町中けたたましく鳴っているわ。

上目づかいに空をみました。空は真夏の燃えあがる前の静けさをまだまだもっていました。どんな異物もよせつけないような青さです。B 29、あの怪鳥のようなアメリカの飛行機が高空をとれば飛行機雲がみえるのに。だんだん大きくなっていく爆音を耳に、私は目だけで飛行機をさがしました。

その時です。突然何もかも、世界中が真っ赤になりました。天全体が私ひとりの上にくずれたのです。とける。私が小さくなっていく。そして、地の中へずるずると吸いこまれていく。

「何？ なにがおきたの。いや！ 死ぬのかしら。」

「助けて、助けて。おかあさん、おかあさん。」

.....
そうです。たった一瞬いつしゆんでした。私は死にました。立っていた土手から川の中へ吹きとばされて。

よくお父さんが、「かわいい」といってくれた二つの目は、かえるの目のようにとび出し、一二歳の花びらのような唇くちびるいっばいに長い舌をはき出し、おかっぱの髪かみの毛は枯葉のようにもえちぢれ、顔も手も足も肉まで黒くこげて……、元安川もとやすがわの水の中に浮いていました。

世界は天地がつくられた初めにもどったかのようにでした。どこが陸かどこが水か。暗黒がひろがり、音ひとつしませんでした。時間が消えたの？ お日様がおちたの？ 何が、何がおきたの。

闇やみがしだいに晴れていくと、その闇の中からは白く川岸の石垣があらわれ、その石垣のところどころも、岸の上もめらめらと炎ほのおがはっていました。紅あかい長い舌のようにもえる炎。青い光を放つ炎のしん。川の水は怒濤どとうとなって兩岸にぶっつき合い、私の体はうずの中へまきこまれ、また浮き上がり、左へ右へ木の葉のようにゆさぶられました。

いつか波が静まるころ、兩岸は灼熱しゃくねつした溶鉱炉ようこうろの中のように燃えていました。火の粉が川にふり、川は血のようにそまり、風がただけしく狂くるい始め、川の面は波しぶきがたち

こめました。海からの潮がひくにつれて、そのもえさかるヒロシマの街を、私は海へ海へと流されていきました。何千人、何万人の人びとの死がいといっしょに。くびのない男。手のちぎれた赤ちゃん。足だけが炭になった女の人。そして犬も猫も馬も。魚までまっ白い腹をかえして。どれもこれも、みにくくふくれていました。川は死がいでもり上がって、海へ流れていきました。

海に出て何日も何日もたちました。私たちの体は腐りはじめました。汚物のようになぐる体を、小さな魚はより集まって肉をかじり、大きな魚は小さな魚がかじりかかった裂け目から鋭い歯で肉をひきちぎっていきました。私はだんだん人間の体ではなくなっていくのです。

いつか、このあてどないさすらいも終わる時がきました。手がとれ、足がとれ、そしてまず頭が、そして胴体が深い深い海の底の砂地へゆっくりと沈んでいきました。

日のきらめきも、風の音も、遠くの遠くの出来ごとです。暗い冷たい海の底の藻のそばでいま私は眠っています。

お母さん、あの日、私の上に何がおきたのですか。私は死ななければならぬわるい子だったのかしら。

お勉強こそあんまり好きじゃなかったけど、先生は、すなおない子だっていつもほめてくれたわ。優等賞はもらったことないけど、小学校のときは皆勤賞を何度ももらった。

……お母さんの手伝いもちゃんとしました。朝お母さんより早く早くおきて、いつもご飯つくったじゃない。お掃除だって、毎日したし……おばあちゃんはよく言ったわ。「喜久子は、ほんとにいいおねえちゃん」だって。

夕食の時だって、お皿の上のお芋、そっと弟たちの皿に少しずつわけてやった。いつかおばあちゃんが、「お前も食べなきゃいけないよ」と怒ったけど、「おなかすいてないわ」と意地をはっちゃった。すいてなかったんじゃない。あのあと、水を何ばいものんだわ。だけど、弟たちがひもじいと夜泣くの見えいらなかったの。

ねえ、お母さん、私のどこがわるかったのかしら。どうして、みんなといっしょに生きてはいけなかったの。

洋服がほしいといったわけじゃない。お菓子がほしいといったわけじゃない。いつも、変な服とモンペをはいて、お腹がすいてもじっとがまんして、生きてきました。

先生は、「いつか敵軍が上陸してくるかしかない。そんな時は女でもかくごしなればならぬ」といっていました。その時には、その時でかくごしなればと思ったこともありません。でもおばあちゃんは、「死ぬのなら、みんなだね」と口ぐせのように言っていましたね。

何のかくごをするひまもなく、私ひとりお母さんと離れて、どうして死ななくてはならなかったの。

でも、じつと海の底にいます、思えてくるのです。これが戦争なんだと。本当の戦争は、何のわるいこともしない子を、突然殺すのね。

お母さん。弟たちの子どもに言っていて。口のきけない私の代わりに言っていて。戦争はダメだって。

原爆はダメだって。

どんなにいい子でも、みな殺されるって。

今日も暑かったね。学校でプールに入ったって……どのくらい泳げるようになった？ 五〇メートルは大丈夫か。
倒れた校舎からはい出て

どうして、小さい時からお父さんがお前をプールにつれて行かなかったか

というの。もちろん、お父さん泳げないわけじゃないさ。でもプールはいやな思い出があるんだ。あの芋いもを洗うように人がいっぱい入っているプール、あれをみるとお父さん、なんともいえない悪寒おかえにおそわれるんだ。

いつか一回はお前にも話しておこうと思っていた。

あの時、お父さんは中学の一年だった。そう、ちょうど今のお前と同じ年齢としだ。お父さんの通っていた中学は、広島でもいちばん古い伝統のある中学だった。大きな石の校門を入ると、飾り気のないがっしりとした古びた校舎が威厳にみちて建っていた。校庭には、空をつくように高いポプラが何本もあった。

そのころ、太平洋戦争は末期を迎えていた。お父さんが一年生になってすぐの五月、ドイツは連合国に降伏した。六月に沖縄で日本軍は全滅した。本土にいよいよ敵が上陸してくる。その時こそ国民は全滅を覚悟で戦うという「本土決戦ほんどけつせん」がいたるところで宣伝されていた。今のお前たちには、ちょっと理解できないだろうが、お父さんだつて「爆薬をもつて戦車にとびこめ」と命令されれば、いつでもそうする覚悟はできていたんだ。学校には、二年生以上はいなかった。工場へ動員かきされていたんだ。

八月六日の朝、一年生みんなが家屋疎開かおくそかい作業をやらされることになった。空襲くうしゅうがあった

とき逃げられるように、密集した家屋はとりこわしておこうというわけだ。学年は奇数学級と偶数学級にわけられ、一時間交替に作業をすることになった。まず奇数学級が番にあり、お父さんのいた偶数学級は教室に入って待機した。

教室で単語帳を開く者、雑談する者、時間割変更をうつす者、その時、飛行機の爆音が聞こえた。二、三人、教室の窓から首を出して空を眺める者もあった。その頃、制空権はすっかりアメリカ空軍に奪われていて、毎日敵機の来襲や通過があったので、だれも「またか」と思った程度だった。

その時、ピカッと世界中が光った。

どのくらい時間がたったかわからない。気がつくと、体全体が何かにおさえられている。上からぼろぼろと落ちてくる壁土、硫黄を燃やしたような強い臭い。口の中は土だらけだった。何かを叫んだ。待てばだれかが助けに来てくれる。私は助けを呼びながら、待った。しかし、だれも来ない。手足を少しずつ動かしてもがきながら、体を押さえつけている板や材木を、長い間かかっていたのけた。やっと、前方にうす明かりがみえた。それへむけて、私は少しずつ這っていった。

やっとぬけ出すと、あたりはまっ暗だった。闇が時どきすうっと薄くなることがあった。

そうすると太陽はむら雲の中の月のようにみえた。そして校舎の大きな屋根が小山のよう
にうかび、瓦かわら、ガラスはごじゃごじゃにくずれていた。

「オーイ」「オーイ」と私は叫んだ。それに答えるように、「おかあさん」「天皇陛下てんのうへいか万歳ばんざい」
という声が地面から聞こえる。いつのまにか、這い出してきた友人二人が私のそばにいた。
私の立っている下の方で、だれかが叫んでいる。私たちは、一生懸命、つみ重なっている
瓦・ガラス・板をどけた。中から二人の友が出てきた。一人は出るとしゃがみこんで嘔吐おうと
をはじめた。胸をやられて、シャツはまっ赤に染まっていた。もう一人は足が折れていた。

「この板をどけて、苦しい」という声が聞こえた。私が板をのけると、泥と血にまみれ
た顔が出てきた。私に「川井、助けて」という。だけど私にはだれだかわからない。「ぼく
じゃ、山田だ。」「山田か。」手をにぎってひっぱった。しかし体は動かない。足をはりの
間にはさまれて、出ることができないのだ。

あっちからも、こっちからも炎ほのおがめらめら、めらめらと上がりはじめた。「畜生ちくじやう、畜生」
「頑張り精神だ」「おかあさん」そんな声がきこえてくる。炎はどんどん迫り熱い風が
おそってくる。私はどうしようもなくなつて、「山田、許してくれ。きっと仇かたきをとってや
るぞ。仇をとってやる」と叫びながら、その場をはなれた。

1 ある日突然

山田は、「川井、川井くーん、おかあさーん」と呼びつづけていた。

プールのへりには、けがをした人たちがもういっぱいいた。どの顔も、お椀をかぶったように頭髮がのこっていた。帽子をかぶっていたところだけが焼け残ったんだ。佐藤はまぶたが焼けて、その皮がだらりと目を蔽っていた。独り言のように、「目が見えん。目が見えん」といつづけた。プールをめざして、近所の女学校から女学生たちが、そして学校のまわりの人がぞくぞく逃げてきた。プールの中もへりも人でいっぱいになった。

お父さんは、その時やっと自分が怪我をしているのに気がついた。頭と左腕に深いきずがあり、血が流れている。右足がものすごく痛む。ズボンにじつとりと血がにじんでいる。ゲートルで頭と腕と足をそれぞれにきゅつとしばった。足をしばったゲートルは友だちからかりた。

校舎はもう炎につつまれ、熱風がおそってくる。校庭のポプラも燃えはじめた。「どうしよう、このまま、プールのところにおいていいか。」

そんな時、担任の吉本先生がパンツ一枚でやってこられた。先生もお椀のような頭をしておられ、全身から破れたポロのように皮膚がさがっていた。私たちは手ぬぐいをさいて、はだしの先生の足をまき、少しでも先生が楽に逃げられるようにした。そしてプールを離